

縄文土器

1979
作品ナンバー0166

文部省特選 1979年教育映画祭優秀作品賞

縄文土器は、日本列島の住民が最初に作りだした土器であり、文様の多様性、装飾の豊かさ等から世界の先史時代にも類のない豊かな造形を持つユニークな存在である。この映画は、土器を編年的にみて、縄文時代全体を大きな文化の流れとしてとらえようとした。



長い氷河の時代が終わり、日本列島が雪解けの季節を迎えた頃、私たちの祖先も新しい文化を生み出した。縄目文様を付けた土器に代表される縄文文化である。土器の破片の発掘と修復作業から、それを使った祖先の暮らし、作った人の心まで推測していく。

縄文時代は編年的にみて5つの時期に分けられる。まず早期の土器には、丸底の他に底の尖ったものが多い。狩猟生活で移動中に焚火の中で立てて煮炊きするのに便利だという説がある。その用途を再現してみる。ついで前期は気候も温暖になり、住居も定着したためか土器も大型化し、のびやかな形を示す。縄目による文様も100種をこえ、その表現も豊かになる。縄文文化の最盛期である中期には、代表的な火焰土器、水煙土器が造られ、エネルギーに満ちた表現がみられる。当時の住居も復元して、狩猟と採集の生活を想像することができる。この時期には、土俗的な信仰を思わせる蛇や獣、人面が、好んで土器の装飾に使われている。貝塚ができたのもこの中期である。後期には、土器はいつそう洗練され、土器作りの技術も高度になる。儀式に供えたものか呪術的な雰囲気を持つ土器や土偶も数多くなり、自然を畏れていた当時の人々の精神文化を窺わせる。晩期の縄文文化は、サケ・マスなど漁労が盛んだった東北地方で最後の花を咲かせている。漆で赤い色を付けたり、形も工芸品を思わせるような精緻なものになっている。同じ頃、すでに西日本には、稲作と金属器をとまなう大陸の文化が押し寄せていた。

記録
35ミリ
カラー／24分

■企画
東京国立博物館

スタッフ
■製作
村山英治
■脚本
米内義人
花崎 哲
■演出
米内義人
■撮影
福井久彦
■照明
監物邦雄
■音楽
染谷欣吾
■編集
民野和子
■解説
小林恭治